

# 南海の孤島と核実験

—ゴールディング『蠅の王』からバラード「終着の浜辺」へ—

奥 畑 豊

## 1. はじめに——バラードとゴールディング

「内宇宙」を探求する思弁的で難解なSF小説や性的倒錯を実験的手法で描いた作品群で知られるJ・G・バラードが、寓話小説『蠅の王』(*Lord of the Flies*, 1954)の著者である同時代の先輩作家ウィリアム・ゴールディングを尊敬していたことはあまり知られていない。バラードは、一九九三年のゴールディングの訃報に際して寄せたコメントの中で『蠅の王』が「大戦以降、最も重要な小説の一つ」であると明言しつつ、この作品が第二次世界大戦の負の遺産や悪の問題、そしてナチズムといった主題を扱っていることを喝破している(Ballard, *Quotes* 96)。コラージュの手法を駆使したシュールレアリスム的な連作短編集『残虐行為展覧会』(*The Atrocity Exhibition*, 1970)や物議を醸した長編『クラッシュ』(*Crash*, 1973)のように逸脱的で不穏な作風を得意とするバラードと、しばしば素朴なモラリストとみなされるゴールディングの組み合わせは一見するとかなり奇妙であるが、実は何人かの批評家が既に両者の関係性に着目している。例えば、バラードの伝記作家ジョン・バクスターは彼の代表作『太陽の帝国』(*Empire of the Sun*, 1984)がゴールディングの『蠅の王』と同じく「エドワード朝及びヴィクトリア朝における青少年向けフィクションの形式を用いることで、最も規範的な帝国の息子たちさえもが圧力に屈してしまうことを示そうとした」と主張している(Baxter 266)。また、D・ハーラン・ウィルソンは、富裕層の子供たちの反抗と「親殺し」を描いた後期バラードのミステリー風小説『殺す』(*Running Wild*, 1988)の中に『蠅の王』の影響を見出している(Wilson 150)。それだけでなく、デイヴィッド・イアン・パディは世界の終末を視覚化したバラードの初期三部作——『沈んだ世界』(*The Drowned World*, 1962)、『旱魃世界』(*The Drought*, 1965)、『結晶世界』(*The Crystal World*, 1966)——に文明人の墮落を描いたゴールディングとの共通点を読み取るばかりか(Paddy 46)、中期の名作『ハイ・ライズ』(*High Rise*, 1975)を『蠅の王』への応答として解釈している。

洗練された巨大高層建築に住む中産階級の富裕層が停電に伴う混乱を機に対立し次第に暴徒化していくという『ハイ・ライズ』の物語は、パディによれば「十九世紀の植民地主義と結びつけられる価値観に挑戦し、それを反転させる」という点でゴールディング的である(149)。確かに、複数の先行研究が明らかにしている通り、ゴールディングの『蠅の王』はヨーロッパ(とりわけイギリス)が生み出した無人島小説の伝統に見られる傲慢な文明観や植民地主義的イデオロギーを反転させた物語となっている<sup>1)</sup>。事実、原住民フライデーを「啓蒙」し、絶海の孤島を文字通

り開拓してゆくロビンソン・クルーソーの漂流記のみならず、西洋文明の最終的な「勝利」をやみくもに強調する冒険小説の系譜は必然的に問題を孕んでいるが<sup>2)</sup>、ゴールディングは南海の無人島というトポスを敢えて借用しつつ、そうした物語群を書き換えようと試みている<sup>3)</sup>。また、バラードがインタビューの中で示唆していたように、ゴールディングの『蠅の王』にはヨーロッパが生んだ究極の野蛮としてのナチズムへの批判が多分に含まれている。作中でアドルフ・ヒトラーさながらの独裁者と化した少年ジャックとその配下の狩猟隊は、狂乱の中で仲間のサイモンとピギーを惨殺したあと、元リーダーのラルフを豚と同じように「狩り」始める。近眼で喘息持ち、そして肥満という身体的特徴を備えたピギーはジャックたちから役に立たない存在として迫害され、死に追いやられるが、そうした行為には「劣等人種」の殲滅や優性思想といったイメージが明らかに付与されている。いわば最も文明的で偉大だと信じられてきたイギリスの子供たちさえもが、物語の舞台である無人島という孤立した空間において、まさにホロコーストのような野蛮へと転落してしまうのである。

もちろん、パディが言うように西洋文明の中に野蛮を見出すゴールディングは「全人類が生まれながらに悪である」と性急に結論づけてしまうという点で、バラードとは若干異なっている(Paddy 158)。だがバラードは『ハイ・ライズ』において、少なくともこのゴールディングの文明批評の構図を現代都市の高層建築へと移し替えてつつアップデートしようと試みている<sup>4)</sup>。このように、異端のニュー・ウェーブSF作家バラードが意外にもゴールディングと似通った西洋文明に対する眼差しを有していたことは明らかである。しかしながら、『蠅の王』の重要性に注目したバクスター、ウィルソン、パディといった先述の批評家たちは、このゴールディングの小説における南海の孤島という舞台装置が、実はバラード文学のより重要なテーマの一つである核の問題と密接に結びついているという事実を看過している。また、核戦争が繰り返される近未来を描いたこの『蠅の王』という作品それ自体が、実のところバラード顔負けのSF的想像力を備えていたという点も、多くの批評家たちは見過ごしている。そして最後に、殆どの先行研究はバラードの最も有名な短編の一つである「終着の浜辺」(“The Terminal Beach,” 1964)が、ゴールディングの『蠅の王』と核という主題を介して結びついていることを十分に論じていない。以上の観点から、本稿では核時代の物語として『蠅の王』を捉え直しつつ、それから約十年後に出版されたバラードの短編をゴールディングによる先行作との関わりから検討し直してみたい。

## 2. 南海の孤島というトポス——ゴールディング『蠅の王』

ゴールディングが『蠅の王』を出版し、四十四歳にしてイギリス文学界に遅咲きのデビューを飾ったのは、奇しくも二十三名の乗組員を乗せた日本のマグロ漁船が太平洋ビキニ環礁沖でのアメリカの水爆実験(通称ブラボー実験)に巻き込まれて被爆するという、いわゆる第五福竜丸事件が起きた一九五四年のことである。全世界に衝撃を与えたこの事件に先立って創作されたゴールディングの近未来小説は、まさに核兵器を用いた地球規模の大戦争が巻き起こっている最中に、英国から疎開する少年たちの乗った航空機が攻撃を受けて墜落し、彼らが珊瑚に囲まれた南海の無人島に漂着するというエピソードで幕を開ける。作中で登場人物の一人ピギーが「パイロットが言ったこと聞かなかったのかい。原爆のこと。もうみんな死んでるよ」という台詞を残してい

るように (Golding, *Lord* 11)<sup>5)</sup>、物語の背景をなす核戦争という出来事は、実のところこの孤島における少年たちのサヴァイヴァル生活に最初から暗い影を落としているのである。

アメリカが世界初の核実験を成功させ、広島と長崎に原子爆弾を投下したのは一九四五年のことであるが、冷戦の進展に伴って東西の主要国は次々この禁断の兵器の開発とテストに手を染めてゆく。もちろん、一九五一年に初めて使用されたアメリカのネヴァダ核実験場のように砂漠の中に建設された施設もあったが、最初期の大規模な実験はしばしばビキニ環礁やエニウェトク環礁といった太平洋上の孤島群で実施されている。このゴールディングの無人島小説を核文学として読むという試みは（英語圏においてさえ）未だ十分になされていないものの、『蠅の王』がこうした時代の産物であることは間違いない。例えば、当時まだグラマー・スクールの教師に過ぎなかった作者は一九五一年から翌年にかけてこの小説を執筆し、初稿の末尾に脱稿日と思われる「一九五二年十月二日、十六時」という日時を赤字で記したそうだが (Carey 150, 155)、本作の日本語版の翻訳者である黒原敏行は、ある記事の中でそれが「イギリスが初原爆実験に成功した一九五二年十月三日午前零時（グリニッジ標準時）の八時間前」であるという興味深い事実を突き止めている。黒原はこの小説と「核戦争の問題」との密接な関係性を強調しつつ、物語の舞台となる場所について次のような大胆な仮説を立てている。

グリニッジ標準時で一九五二年十月三日午前零時のときに、一九五二年十月二日十六時である場所は、西経百二十度。南太平洋上だとすれば、イースター島の西のほうだ。つまりこれは小説の舞台となる島の場所をあらわしているのではないか。当時、核戦争が起きればイギリス市民はオーストラリアに避難することになっていたという。イギリスからオーストラリアに飛ぶ場合、核戦争が起きているのだから、ユーラシア大陸やアフリカ大陸など多数の国があるほうではなく、大西洋を横断して南米を越えていこう。資料のなかには、島はニューギニアの近くにあるとするものもあるが、根拠はわからない。(黒原)

黒原がここで挙げている一九五二年のイギリス史上初の核実験はハリケーン作戦と呼ばれるものであり、それはオーストラリア西部のピルバラ海岸沖に位置するモンテベロ諸島において実施された。残念ながら、彼が推定するイースター島西側の「南太平洋上」という地理上の領域は、明らかにオセアニアのモンテベロ諸島とはかけ離れているため、『蠅の王』とハリケーン作戦との具体的な関わりは希薄だと考えられる。また、黒原による考察はここで唐突に終わっており、それ以上の論証やテキスト分析には至っていない。とはいえ、少なくともゴールディングの傑作が米ソ冷戦下の核実験という現実世界における重大事件に彩られていたというのは確かであろう。実際、この小説の執筆時期に当たる一九五一年にはアメリカによってグリーンハウス作戦と総称される四つの大規模核実験が実施されているし、作者がこの小説の初稿を書き終えたと思われる日付——すなわち、イギリスによるハリケーン作戦が行われたのとほぼ同じ日付——のおよそ一月後には、再び米軍によって史上初の水爆実験を含むアイヴィー作戦が実施されている。このように、執筆中から脱稿後にかけての幾度にもわたる核実験や、出版年における第五福竜丸事件などを考慮に入れるならば、『蠅の王』という小説に核を巡る人類の負の歴史がまわりついていると言うのは、あながち誇張にはならないだろう。

もちろん、先述したようにゴールディングは南海の孤島というトポスが包摂するヨーロッパ無人島小説群の枠組みを借用し、それらが孕むイデオロギーを反転させ逆転写する形で『蠅の王』の物語を組み立てることで、帝国／植民地主義のような現実世界の問題に切り込んでいた。また彼が、西洋文明が生んだ野蛮の象徴としてナチスによる虐殺を念頭に置いていたことも間違いのない<sup>6)</sup>。しかしながら、コロニアリズムとホロコーストというゴールディングが問題にした過去の人類の負の記憶は、本作の舞台設定が孕む一九五〇年代初頭の核実験を巡る暗黒のイメージの中で（恐らく彼自身の意図を超えて）全く新たな意味合いを帯び始める。例えば、ビキニ環礁とエニウェトク環礁を中心に六十七回もの核実験が行われたマーシャル諸島は、太平洋戦争のあと米軍に占領され一九四七年からアメリカの信託統治領となった地域であり、同国の植民地同然の扱いを受けていた。事実、米軍が行った合計六回の核実験の総称である一九五四年のキャッスル作戦において、マーシャル諸島の住民はおよそ一万五千人が被爆している（豊崎「キャッスル作戦」24）。何の通告もなく実施された第一回のブラボー実験の直後、アメリカの水上飛行機と船舶が核実験場付近のロンゲラップ島を突如訪れ、八十二名の住民を避難の名目で半ば強制的に連行し、クワジェリン島の米軍基地に設けられたキャンプに収容した（24-25）。被爆した島民たちはそこでまともな治療さえ施されず、大量虐殺（＝核によるホロコースト）を可能にする水爆の威力を測定するためのいわば実験台として、様々な調査を強要されたのである。同時期にそのキャンプに収容されていた近隣のウトリック島の住民が実験から三か月後に帰島を許されたのとは対照的に、彼らはマジロ環礁のエジェット島という別の島に移住させられる。その間、ロンゲラップ島村長を含む数名の被爆者たちは体内放射能検査を受けるためアメリカ本国へ送られている。かつての島民がロンゲラップ島に戻ることができたのはやっとなら一九五七年六月になってからであるが、そこで彼らは故郷が変わり果てた姿になっているのを目撃する（28-29）。そして一九六〇年代に入ると、ロンゲラップ島の住民には甲状腺異常が恒常的に見られるようになり、遂には癌で死亡する者も現れ始めたという（30）。

このように、大国アメリカが信託統治領の住民を巻き込んで実施する核実験や、その後の強制移住、被爆者に対する人体実験さながらの検査、そして大量殺戮を可能にするための軍拡競争などは、冷戦当時の「現在」における新たなコロニアリズム、或いは新たなホロコーストの可能性を示すものとして読み換えることができる。このことは無論、アメリカだけに該当するわけではない。実際、ゴールディングの母国イギリスもまたこの大量破壊兵器の開発に早くから取り組んでいたし、同国にとって初の核実験が豪州モンテペロ諸島で実現したのは、オーストラリアの首脳たちが独立後も「植民地時代さながらの精神構造」を持っていたからである（ファース22）。しかも両国は「皮膚の色や文化が違う人種が死のうと生きようと、そんなことは気にもしないという全くの無関心」から、核実験の被害を受ける住民アボリジニに何の配慮も行わなかったのである（107）。

『蠅の王』が問題化する西洋近代の帝国／植民地主義からホロコーストに至る歴史の暗部は、この南海の孤島というトポスにおいてこうして新たな形で再結実する。もちろん、一九五二年に既に初稿を書き終えていたとされるゴールディングは、国家機密でもあるアメリカやイギリスの核実験の詳細については承知していなかっただろう。とはいえ、彼が南海の孤島というこの小説の舞台設定をその当時の核を巡る言説に結びつけ、なおかつそこに一種の捻りが加えていたこと

は間違いない。そもそも、米軍のアイヴィー作戦で炸裂した水素爆弾によって木っ端みじんに吹き飛んだと言われるエルゲラップ島の有名な例を挙げるまでもなく、核実験は珊瑚礁に囲まれた南国の孤島という自然豊かな「地上の楽園」を死と不毛の土地、或いは突如として出現した深く巨大なクレーターに象徴される「地獄の入口」に変えてしまう。ゴールディングが自作において巧みに利用するのも、まさにこうした南の島というトポスが孕む——楽園と地獄という——相反するイメージに他ならない。

ゴールディングは文明と野蛮のような二項対立的な要素を敢えて多用し（ときにそれらを脱構築しながら）物語を練り上げてきた作家である。従って、『蠅の王』の舞台に交錯するイメージの二面性にも注意が払われなくてはならない。実際、物語の背景をなす核戦争の最中、少年たちは航空機で疎開先へ向かっていた際に攻撃を受け、珊瑚礁に囲まれた絶海の孤島という、まさにビキニやエニウェトクといった核実験場を連想させる場所に漂着する。しかし、第二次世界大戦後の度重なる核実験によって一般に付与された死や不毛、或いは汚染や破壊といったイメージは、この島には皆無である。そういった地獄的な要素を象徴するはずのこの場所は豚などの野生動物や果物の豊富な自然の楽園として逆転した形で提示され、それはむしろ原爆を用いた世界戦争から子供たちを保護するシェルターないし聖域と化しているのだ。もちろんよく知られているように、この小説ではある年少者が見た悪夢を契機として島内に恐ろしい「獣」が潜んでいるというデマが広がり、子供たちの共同体が大きく動揺してゆく。その後、作中の最も印象的な場面において、ジャックと狩猟隊が捧げものとして残したグロテスクな豚の頭——それこそがベルゼブブ、すなわち「蠅の王」として提示されている——と森の奥深くで対面した純真無垢な少年サイモンは、「獣」が自分たち自身の内面にのみ存在していることを悟る（Golding, *Lord* 200-01）。そのことはこの自然豊かな島が本来、人間による核戦争という醜悪な現実から隔絶したイノセントな場所であったことを示唆している。

当然のことながら、太平洋の無人島というトポスは、大国による「核の遊び場」と化す以前は概してそうした平穏な印象で語られてきたわけであり、別の言い方をすればゴールディングによる反転はそれを単に過去の姿に巻き戻したに過ぎないのかもしれない。しかしながら、実は彼はここにもう一度大きな捻りを加えている。物語の中盤以降、狩猟隊を率いて共同体の秩序を破壊し始めた少年ジャックは主人公ラルフたちに闘争を仕掛け、彼をリーダーの座から追い落とした挙句、二人の少年たちを殺害してしまう。このように、今まさに島の「外部」で大人たちが核兵器を振りかざして繰り広げている三度目の世界大戦さながらに、この無人島ではその先の未来を担うはずの少年たちが彼ら自身の「戦争」を始めている。すなわち、核戦争から子供たちを守る平和な楽園／シェルターとしての物語序盤の無人島像は再び転換され、最後にはまた死と不毛の不吉なイメージがこの島を覆い尽くすのだ。

これまで見てきたように、ゴールディングが『蠅の王』の舞台として設定した南海の孤島という場所は、第一に『ロビンソン・クルーソー』（*Robinson Crusoe*, 1719）以来の無人島文学の伝統的価値観を転倒させ、それが無自覚なまま称揚してきた帝国／植民地主義からナチスによるユダヤ人虐殺に至る西洋文明の歴史的な暗部を暴き出す役割を担っていた。だがそれだけでなく、南洋の孤島というトポスが孕む原水爆実験のイメージは、超大国が現地住民を蔑ろにする冷戦時代における新たなコロニアリズム、もしくは潜在的に起こり得る核による新たなホロコーストを

読者に想起させる。そしてゴールディングは、そうしたイメージを作中で意図的に循環させている。南の島という楽園を——核の力によって——地獄へと変えてしまう「外部」世界の大人たちとは対照的に、この無人島に辿り着いた少年たちは当初、それを理想の楽園／シェルターとみなし、そこに自分たち自身の共同体を構築しようとする。第六章の冒頭には「空には別の光があった。それらの光はぐんぐん動き、瞬き、消えていったが、一万数千メートル上空での戦闘で光が微かに弾けて落ちてくるということは一度もなかった」という風にこの島の上空で行われている空中戦の残光に関する描写があり、それが「大人の世界」と名づけられている(129-30)。ここに示唆されている通り、ゴールディングは少なくとも物語中盤まで、この二つの世界を対極的なものとして描いている。しかしながら、結局は彼らも核戦争に明け暮れる大人たちと同じように、この島をある種の地獄へと変えてしまう。物語の最終盤においてジャックたちは森に火を放ち、それによって炎が次第に島全体を焼き尽くしていくが、ラルフは彼らを「あの馬鹿ども」と罵りながら、「果物の林もじきに燃え出すだろう——そしたら明日から何を食べるんだ」と自問する(279)。このことは、豊饒な南国の楽園が核戦争の脅威の中で子供たちを保護する聖域から、まさに不毛の地獄へと転じてしまうということを意味している。その点で、炎の中を駆け抜けて海岸まで逃げ延びたラルフが英国海軍士官に辛くも救助されるというこの小説の結末は、「外部」における大人たちの世界と無人島における子供たちの「閉じた」世界とが再接続されることの暗示として理解できる。ジョン・ケアリーによるゴールディングの伝記によれば、『蠅の王』の冒頭には当初(のちに出版社の要望で削除された)無人島上空での激しい空中戦の直接的描写があったそうだが(Carey 154)、その事実は——核戦争を象徴する炎のイメージから、平穏な楽園のイメージを経て、最後に炎上する森林の描写に再び至るという——循環構造を作者が強く意識していたことを証明していると言える。

以上のように、ゴールディングの『蠅の王』において核戦争を繰り広げる大人たちの世界から——皮肉にも空中戦に伴う墜落事故によって——南海の孤島という楽園／シェルターに逃れ出た子供たちは、そこに自分たちの王国を築こうとするが失敗し、結局は血生臭い大人の世界にまた回収されてしまう。換言すれば、浜辺に現れてラルフを助けた英国海軍の大人たちは、いわばこの島で残虐行為を働いた子供たちのその後の姿である。未来を担う子供たちの成長から、ひいては高度な文明社会における人間性の進歩までも完全に否定するこのパessimスティックな暗示こそが、実は『蠅の王』から十年後にバラードがSF短編「終着の浜辺」において再提示したものに他ならない。だが次節で詳しく見ていくように、無人島に付与される循環するイメージを通じて一向に進歩しない人間の野蛮な本質を描き出すゴールディングに対して、バラードはそれを化石のように静止し、半永久的に滞留し続ける時間というモチーフに変換しつつ視覚化しようと試みている。

### 3. 時間の滞留——バラード「終着の浜辺」

一九五〇年代前半に書かれたゴールディングの小説と、一九六四年にニュー・ウェーブSFの牙城『ニュー・ワールドズ』(New Worlds)誌に掲載されたバラードの「終着の浜辺」の間には、キューバ危機に加えてさらに多くの核実験や原水爆を巡る国際社会の出来事が横たわっている。

しかし、両者のテキストを一見してより大きく分かつのはその形式の違いである。ゴールディングの小説が神話的な重厚さを持ちつつもリアリズムを軸に構築されているのに対して、バラードの短編はより先駆的である。事実、バラード自身が明言しているように、「終着の浜辺」はのちに『残虐行為展覧会』で彼が大々的に実践する「濃縮小説」(condensed novel)の実験的方法論を先取りした断章／コラージュ形式で書かれている (Ballard, *Extreme Metaphors* 19, 53)。そのため起承転結を備えた明確なプロットは存在しないものの、本作は元空軍パイロットのトレイヴンという主人公が妻と息子を突然の交通事故で亡くしたあと、かつて核実験場だった南太平洋のエニウェトク環礁を秘密裏に訪れるという大まかな筋書きを有している。

ゴールディングの『蠅の王』と同じく、「終着の浜辺」の舞台となるのは南海の珊瑚島というトポスである。この実在の環礁は一九二〇年以降、国際連盟によって日本の委任統治領とされていた地域であり、太平洋戦争下での激戦を経てアメリカ海軍の施政下に置かれている。大戦後、「隔絶した場所にあり、居住者が少なく、かつ観測機器を置く場所が確保できるから」という米軍側の身勝手な理由によってビキニ環礁に続く新たな核実験場に指定されると (竹峰 189)、エニウェトク環礁の住民たちは紆余曲折を経て一九四七年にウジェラン環礁にある縁もゆかりもない無人島に半ば強引に移住させられてしまう (194-97)。その後、エニウェトク環礁は先に言及した人類初の水爆実験アイヴィー作戦の他、合計四十三回もの核実験 (うち水爆実験が六回) の舞台になっているが、一九五八年八月一八日を機にその役目を終えている (豊崎『世界のヒバクシャ 1』37)<sup>7)</sup>。

一方で、物語の舞台描写にはバラードによる空想が多分に含まれているものの、米国原子力委員会によって公的に打ち捨てられ立入禁止となったこの環礁は大部分が人工構造物で成り立っており、そこには核兵器試験用のコンクリート掩蔽壕や塔、迷路のように幾何学的に立ち並ぶ巨大なブロック群、滑走路、無機質な建造物、生ぬるい水を湛えた貯水湖、旧式の戦闘機、潜水艦ドック、そして等身大の不気味なダミー人形などが残されている。バラードが描くこうした南海の無人島は、ゴールディングの『蠅の王』が前半部分で提示する自然豊かな楽園としてのそれとは異なっている。この短編は掩蔽壕で波の音に目を覚ましたトレイヴンが砂の上をおもむろに歩き始める場面で幕を開ける。生気のない人工物に取り囲まれた終末的なヴィジョンの中を、栄養不足による脚気と衰弱に苦しみながら歩き回り浜辺へと向かおうとする彼の陰鬱な姿は、金髪の少年ラルフと喘息持ちの太った男の子ピギーが美しい礁湖の近くで出会うゴールディングの小説の鮮やかな冒頭シーンと好対照をなしている<sup>8)</sup>。セネガルの首都ダカール出身のトレイヴンは (Ballard, "The Terminal Beach" 589)、妻子を亡くした喪失感の中で珊瑚礁を目指しモーターボートで当てもなく海を彷徨っていたが、エニウェトク環礁への上陸時に船が座礁して損壊したため、帰還する術を持っていない (591)。トレイヴンは島に上陸して研究調査を行うオズボーン博士に後日発見されるが、「妻と息子を捜しているんです」と謔言を述べる彼にはどうやらこの場所を立ち去る意思がない (598)。事実、彼は海軍の捜索隊が到着すると身を潜め、救出される機会を自ら手放してしまう (600)。しかし他方で、彼は環礁の中央部分に位置し巨大な迷路を形作っている無数のブロック群を見つけると、「この島の内なる領域はまだ未探査であるという思いつきだけに突き動かされて」掩蔽壕の外を冒険し始める (594)。放射能により被曝して弱りきったトレイヴンは虚ろな状態でこのコンクリート製ブロックの迷宮に何度も迷い込むが<sup>9)</sup>、彼がオズボーン

によって発見されたのも、まさにそうしたときであった。

この一見して明確なプロットを欠いた奇妙な物語において、実はバラードはゴールディング的な循環の構造を導入している。既に指摘したように、この物語は主人公のトレイヴンが荒れ果てた掩蔽壕で波の音に目を覚ます場面で幕を開けるが、彼はそれを遺棄されたエニウェトク環礁にもはや存在するはずのない「滑走路のはずれで暖機運転している巨大な飛行機の爆音」に喩えている（589）。そして、これに続く冒頭の第二文は次のような唐突な表現を含んでいる——「日本本土に対するこの大規模夜間空襲の記憶が、この島での最初の数か月間、周囲の空を炎上して墜落していく無数の爆撃機のイメージで満たしたのだった」（589）。トレイヴンはダカールの出身であるから、彼が日本における空襲の記憶を持っているはずはない。もちろん、付近にある滑走路跡にはもはや使われていないB29が何機も放置されているため、彼がそこから何らかの連想を得た可能性はある。また、彼がかつて米空軍に所属していたということも考えられるが、作中にそのような記述はない。しかし読者を冒頭から困惑させるこの不可解な描写の謎は、物語を最後まで読み進めると氷解する。本作の最終盤において、トレイヴンは環礁内の砂丘付近にある地面の裂け目の中に日本人の医師か弁護士と思しき死体を発見する。その男はどうやらトレイヴンと同じくこのエニウェトク環礁に上陸したものの、飢餓と衰弱の中で命を落としたらしい。

トレイヴンをじっと見上げている、この死体は、左手の裂け目のそこにじっと横たわっていた。がっしりとした体格の中年男性で、石を枕にあおむけに横たわり、両手を左右に広げて、まるで空の窓を眺めているかのようなようだった。この島には小型肉食獣が存在しないので、死体の皮膚や筋肉組織はそのまま保存されていた。（602）

トレイヴンは、この場所で朽ち果てることもなく永久に静止し続ける死者に一種の安らぎを見出しつつ自己を投影する。息子と妻を事故で失ったトレイヴンは、この日本人が一九四四年の大阪空襲で姪と甥を亡くしたというトラウマ的「物語」を作り出し、核実験場の地表に横たわる身元不明の死者に同情する。後述するようにこの日本人の魂と内的対話を交わしたあと、彼はその亡骸を地面の裂け目から引っ張り出し、掩蔽壕の傍の椅子の上にロープで固定し「威厳のある」ポーズを取らせる（604）<sup>10</sup>。物語はトレイヴンがこの新たな守護者の存在を意識しながら、妻と息子の亡霊を目撃するシーンで幕を閉じるが、そのとき彼は「遠くの岸辺で波が砕け、炎上する爆撃機が夢の中を墜落していく」のを感じている（604）。先に紹介した冒頭の一節に繋がるこの最終盤の表現からも明らかのように、「終着の浜辺」はいわば波の音に付随して想起される燃え上がる爆撃機のイメージによって円環構造を形作っている。そして冒頭に見られた日本の空襲への言及は、最終場面においてトレイヴンが自らを投影するこの日本人の死者の「記憶」と接続されるのである。

放棄された核実験場を舞台にした物語に円環構造を導入する際のバラードの手つきは、ゴールディングの『蠅の王』が人間の不変の本性を暴き出すために核時代の南海の珊瑚島というトポスに付与した循環するイメージに基づいているのかもしれない。ゴールディングの小説において出版直前に削られたとされる冒頭の空中戦や航空機の墜落シーンと終盤において炎上する森林の描写とが当初強く結びついたであろうことを考慮に入れば、バラードの試みがその延長線上にあ

ることが分かるだろう。だがそれだけではなく、「終着の浜辺」においてトレイヴンが日本人の死者（ドクター・ヤスタと名づけられている）と交わす内的対話それ自体もまた、実はゴールドディングの小説への文学的応答になっている。次の引用にあるように、トレイヴンはこの男の亡骸に蠅がまとわりついていることに気づく。

（この裂け目までトレイヴンのあとをつけてきたと思われる小さな蠅が、死体の顔の辺りをぶんぶんと飛び回り始める。うしろめたさを覚えて、トレイヴンは身を乗り出してそれを殺そうとするが、このちっぽけな哨兵はひょっとしたら死体の忠実な話し相手で、そのご褒美に毛穴から豊かな美酒と養分をごちそうになっているのかもしれないと思ひ直す。蠅を傷つけないように注意しながら、彼は手首を差し伸べてそこにとどまるように促す。）（603）

日本人の死体の周りをうるさく飛び回るこの蠅は、ゴールドディングの小説の寓話的クライマックスにおいて、島に広がる森の最深部でサイモンが目撃した豚の頭にたかる蠅たちの不気味な描写と明らかに繋がる。飛び回る蠅たちの「王」、すなわちベルゼブブとしての豚の頭と対面したサイモンは、「お前はここへ一人で来て何をしているんだ」と問いかけられる（Golding, *Lord* 200）。続いて「蠅の王」は「獣」を狩りによって殺そうと試みるジャックや他の少年たちの愚かさを嘲笑ったあと、自分こそがその正体であり、彼らの内面に存在していることをサイモンに告げるのである（200）。

こうした点から明らかなように、バラードの「終着の浜辺」と『蠅の王』には意外にもかなりの同質性が見出される。その他にも、細かな点において両作品は実に多くのモチーフを共有している。例えば、第三次世界大戦中の近未来を描くゴールドディングに対して、バラードは「プレサード」という言葉を用いつつ、「冷戦期とこの島との結びつきは恐ろしく憂鬱なものであり、魂のアウシュヴィッツであって、その霊廟には未だ完全に死んでいない無数の人々の墓が納められていた」と書くことで終末の到来を予告している。（Ballard, “The Terminal Beach” 590）。また、救助を拒み放射能に汚染されたニウェトク環礁にとどまるトレイヴンの様子は、ゴールドディングの小説において海に向けて烽火を焚くことをやめ、無人島内での自給自足を目指すとともに血生臭い闘争に駆り立てられていくジャックの狩猟隊の姿に重なるかもしれない。さらに、『蠅の王』には鬱蒼とした広大な森林や猛々しい岩山といった自然の中を繰り返し探索する少年たちの様子が執拗に描かれているが、ヨーロッパの近代冒険小説から借用したと思しきそうした要素は、バラードの短編においてトレイヴンが探検のたびに迷い込む無機質なブロック群という現代的な舞台装置に変換されている。のみならず、トレイヴンが朦朧とした意識の中で幾度も目撃する彼の事故死した妻と息子の姿は、『蠅の王』において年少の子供たちが恐れる空想上の怪物「獣」にオーヴァーラップする。ゴールドディングの小説においてサイモンは「獣」が実在せず、それが自分たちの内に潜む虚構であることを悟るが、次の引用のようにトレイヴンの前に現れる二人の亡霊も、同様に彼自身の傷を負った深層心理が生み出した幻影に過ぎないと言える。

ブロック群に向かって歩いていたとき、妻と息子の姿が行く手に立っているのに気づいた。二人は彼から十ヤードと離れておらず、その白い顔は殆ど圧倒的な期待の表情で彼を見つめ

ていた。トレイヴンがブロック群からこれほど近いところで二人を見たことは一度もなかった。妻の青白い顔は内部から明かりが灯されているようで、唇はまるで出迎えるかのようにそっと開かれ、片手を上げて彼の手を取ろうとしていた。(600)

しかし「終着の浜辺」においてさらに重要なのは、無人島という舞台装置が持つイメージを何重にも反転させて循環構造を作り出したゴールディングの方法論をバラードが単に踏襲するだけでなく、それを時間の滞留という新たなモチーフで変奏しているという点である。核戦争下における南海の孤島という——原水爆実験を連想させる——トポスを戦火から隔絶された一種のシェルターに転換して提示したゴールディングは、物語を通してそうした自然の楽園が（大人たちの世界と同じく）燃え上がる地獄に再度変貌していく様を描き出した。『蠅の王』のこうした循環構造が一向に解消しない人間の野蛮な本質に対するゴールディング自身の批評眼を反映していることは既に指摘したが、バラードは自らのSF短編において、かつての核実験場という文明やテクノロジーの極点を舞台にしつつ、その停滞した堂々巡りを時間感覚の消失という新たなモチーフに昇華させている。ここでトレイヴンはこの場所を「未来という時間の化石」と見なす一方で(591)、自分自身が遠い過去、或いは「無時間の地帯」に足を踏み入れてしまった可能性を夢想する(592)。作中で彼は数週間にわたって掩蔽壕を離れようとせず、次第にこのエニウェトク環礁という空間が別次元の時間によって支配されていると知覚し始める。そして最終的に彼はあらゆる時間感覚が消滅しまったかのように感じるのである——「時間感覚の全てが消えてなくなり、生活は完全に実存的なものになって、二つの量子的事象のように、瞬間から瞬間へと非連続的に移動する絶対的な断絶になった」(593)。

バラードの短編には不条理文学のように劇的なプロットの展開はなく、主人公トレイヴンには内面的成長も現状打破のための意思も存在しない。ブロック群の迷路で身動きが取れなくなった無力なトレイヴンは時間が「量子化する」のを孤独と共に実感しながら、「何時間も正午のまま」影がその内部に封じ込められていることを悟る(601)。このようにエニウェトク環礁という特殊な場に沈滞する時間の描写は、ゴールディングが呈示しバラードが模倣した循環構造よりもさらに陰鬱かつ過激に、現代文明と人間性への悲観的なヴィジョンを読者の印象に焼きつける。そして、それがバラード特有の詩情と絡み合う最上の瞬間は、時間の滞留という概念に囚われたトレイヴンが錯乱と衰弱の中で、例の日本人の死者と内的対話を繰り返す思弁的な場面である。ここで地面の裂け目に横たわる日本人の亡骸は彼に向けて次のように問いかける——「この島のブロック群の中で、君は遂に時間と空間の危険から解放された君自身のイメージを見出すのだ。この島は存在論的なエデンの園なのに、どうして量子的流転の世界に自分を放逐しようとするんだ？」(603)。時間と存在を巡るこの形而上学的であると同時に狂気に満ちた対話のあと、日本人の死者は自らが辺りを飛び回る「蠅の食べ物となるため」にエニウェトク環礁へやって来たと告げ、トレイヴンにその蠅を殺すように命じる(604)。ゴールディングの『蠅の王』におけるサイモンとベルゼブブとのやり取りを露骨に意識していると思われるこの箇所において、トレイヴンは絶望しながら蠅を殺す。彼はその際に「それは終わりではないし、始まりでもありません」という——まさに先に言及した時間感覚の消失を連想させる——印象的な台詞を残しているが(604)、ここにおいてゴールディング的な文明／人間への批評眼はバラード的なSFの詩学に書

き換えられることで、より先鋭化していると言えるだろう。

#### 4. 終わりに——限界と可能性

ゴールディングの『蠅の王』における南海の孤島という舞台設定は、これまでヨーロッパ無人島小説の系譜という文学史との関わりから論じられてきた。批評家たちは『蠅の王』をそうした先行するテキストへの批判的応答として捉え、その中にイギリス帝国主義・植民地主義やホロコーストを引き起こした西洋文明への作者のクリティカルな眼差しを読み取ってきたのである。だがもちろん、この珊瑚礁に囲まれた南海の孤島というトポスは、本稿が明らかにしてきたように、核時代においてビキニやエニウエトクといった環礁が新たなコロニアリズムの舞台や核による新たなホロコーストの前線基地になりつつある当時の現実を象徴するものでもあった。一方で、こうした文脈において文明や人間本性の進歩／発展という歴史観を否定するゴールディングによる循環の構造を、バラードは「終着の浜辺」の中で単に踏襲するだけでなく、時間の滞留という新たなモチーフに書き換えつつ再提示していると言える。

もちろん、時代の制約からやむを得ない部分もあるとはいえ、ゴールディングの小説とその後書かれたバラードの短編には、今日の視点から見ても不十分な側面がないとは言いきれない。例えば、両者は共に南海に浮かぶ「無人島」を舞台にして核時代の物語を紡いだが、現実におけるビキニやエニウエトクは最初から無人の環礁だったわけではない。太平洋地域における核被害の研究で知られる竹峰誠一郎によれば、「マーシャル諸島の土地制度に照らせば、土地の無いマーシャル人は存在しない。この誰もが持っているはずの、命に相当する自分たちの土地を核実験は奪った」のだ（竹峰 77）<sup>11)</sup>。ビキニやエニウエトクは大国アメリカによる退避命令によって、いわば強制的に「無人島」にさせられたのである。ゴールディングとバラードの小説において、土着の原住民の存在や彼らの生活した痕跡は完全に不可視化されており、無人島が無人島になる以前の歴史が語られることはない。そしてそのことによって、両者の文明に対する洞察はやや奥行きを欠いていると言えるかもしれない。

確かに、ゴールディングとバラードの作品にはこのような限界がある。とはいえ、両者の試みを頭ごなしに否定するのは当然フェアではないだろう。『蠅の王』に関して言えば、この作品を一種の核文学として捉える見方は今まで殆ど提示されてこなかった<sup>12)</sup>。そのため今後、先ほど述べた問題点を吹き飛ばすような新たな解釈が登場する可能性は残されている。また同時に、バラードの文学者としての慧眼も称賛されるべきである。もしバラードが核時代の孤島小説としての『蠅の王』の重要な側面に着目し、自身のSF短編においてそれをエニウエトク環礁の核実験施設を舞台にした「プレサード」の物語として再構築したのだとすれば、彼こそがゴールディングの優れた読み手として、幾多の批評家たちを凌駕する存在だったと言えるのかもしれない。

#### 注

- 1) ゴールディングが対峙するこの文学史的伝統は、十八世紀の実在の遭難者アレキサンダー・セルカークの逸話をモデルにしたとされるダニエル・デフォーの古典的小説『ロビンソン・クルーソー』（*Robinson Crusoe*, 1719）に実質的に始まるが、初期の先行研究はさらにR・M・バラントインの『珊瑚島』（*The Coral Island*, 1857）、ロバート・ルイス・スティーヴンソンの『宝島』（*Treasure*

*Island*, 1883)、アーサー・ランサムの『ツバメ号とアマゾン号』(*Swallows and Amazons*, 1930) といった十九世紀から二十世紀前半にかけての児童小説をも『蠅の王』との繋がりの中に位置づけている (Gindin 20; Oldsey & Weintraub 16; Gregor & Kinkead-Weekes 22)。また、ゴールディングがフランスの作家ジュール・ヴェルヌによる「漂流もの」物語『十五少年漂流記』(*Deux Ans de Vacances*, 1888) を下敷きにしていただ可能性も高い。意外にもジョン・ケアリーによる伝記の中に『十五少年漂流記』に関する記述は登場しないが、ゴールディングが少年時代にヴェルヌを愛読していたことは記されている (Carey 174)。

- 2) 例えば、『宝島』は悪を体現する海賊ジョン・シルヴァーを倒した財宝を手に入れるという勧善懲悪的な筋書きを持っているし、『珊瑚島』や『十五少年漂流記』ではイギリスの少年たちが無人島の逆境を乗り越える子供たちの友情が教訓的に美化され、それが理性や文明という西洋的価値観と無批判に結びつけられている。これに対して、ゴールディングの『蠅の王』は大英帝国の「模範的な担い手」としてのイギリス少年像を提示するこれら無人島小説を巧みに反転させ (奥畑 96)、登場人物たちを当初の目的を忘れて互いに協力せず、「獣」という迷信を恐れ、規則を破り、争い合い、民主主義や合理主義をないがしろにした挙句に殺戮を始める「野蛮人」として表象している。
- 3) またゴールディング自身はなぜか否定しているものの (Keating 215)、『蠅の王』にはジョセフ・コンラッドの『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1902) からの影響も感じられる。
- 4) 例えば、バラードの作中にはこう書かれている——「多くの点で高層住宅は、テクノロジーが真に〈自由〉な精神病理学の表現をどこまで可能にするかという見本であった」(Ballard, *High-Rise* 47)。
- 5) 以下、ゴールディング『蠅の王』とバラード「終着の浜辺」からの引用は末尾の文献表に記載のある翻訳を参照している。ただし、本文との統一を期するために一部表記等を改めた箇所がある。
- 6) ゴールディングのこの種の問題意識は、ナチズムを産んだヨーロッパ文明について鋭い分析を展開した、マックス・ホルクハイマーとテオドル・アドルノの『啓蒙の弁証法』(*Dialektik der Aufklärung*, 1947) とも共鳴していると言えるだろう。例えばロバート・イーグルストーンは、アドルノの名前を挙げつつ、『蠅の王』を「ホロコースト・フィクション」の一種に数えている (Eaglestone 105)。
- 7) しかしながら、エニウエトク環礁は核実験場の閉鎖後も一九六八年までカリフォルニアから発射するミサイルの標的基地として用いられ続け、スクラップだらけの不毛の土地と化した (ファース 56-57)。
- 8) アダム・ピエットはバラードの「終着の浜辺」が核時代をテーマにしたゴールディングの『蠅の王』やネヴィル・シュートの『渚にて』(*On the Beach*, 1957) といった小説と「浜辺／渚」というモチーフを共有していることを示唆している (Piette 162)。
- 9) 作中に挿入されるオズボーン博士の日記の中に、彼が発見したトレイヴンという男が被曝と栄養失調を患っていることが記載されている (Ballard, “The Terminal Beach” 587)。
- 10) 既に述べたように、エニウエトク環礁を含むマーシャル諸島はアメリカの支配下に入る以前は日本の委任統治領であった。そのため、このポーズはかつての宗主国の出身者である日本人が——アメリカに占領され核実験施設に変貌した——この島に一種の象徴として再び君臨するという謎めいた暗示を孕んでいる。
- 11) エニウエトクの場合、一九七七年から三年にわたる除染作業が続けられ、やっと島民の帰還が許されたのは強制退去から三十年以上が経った一九八〇年のことだった。しかし、環礁の北西部は人が住めないほど汚染されており、殆どの島が居住不可能な状態だった (ファース 59-61)。
- 12) ただし、そうした試みの実例が全くないわけではない。例えばブライアン・アイルランドは新たな解釈を提示することこそしていないものの、『蠅の王』を核時代という歴史的コンテクストに位置づけようとしている (Ireland 35-39)。

## 参考文献

- Ballard, J. G. *Extreme Metaphors: Collected Interviews*. Fourth Estate, 2014.
- . *High-Rise*. Liveright Publishing Corporation, 2012. [バラード、J・G『ハイ・ライズ』村上博基訳、東京創元社、二〇一六年]
- . *J.G. Ballard: Quotes: Does the Future Have a Future?*, edited by Mike Ryan and V. Vale, Re/Search Publications, 2004.

- . “The Terminal Beach.” *The Complete Stories of J. G. Ballard*. W. W. Norton, 2010, pp. 589-604. [バ  
ラード、J・G「終着の浜辺」増田まもる訳『J・G・バラード短編全集3——終着の浜辺』柳下毅一  
郎監修、浅倉久志ほか訳、東京創元社、二〇一七年、177-203頁]
- Baxter, John. *The Inner Man: The Life of J. G. Ballard*. Weidenfeld & Nicholson, 2011.
- Carey, John. *William Golding: The Man Who Wrote Lord of the Flies*. Faber and Faber, 2009.
- Eaglestone, Robert. *The Holocaust and the Postmodern*. Oxford UP, 2004.
- Gindin, James. *William Golding*. Macmillan, 1988.
- Golding, William. *Lord of the Flies*. Penguin Books, 2006. [ゴールドディング、ウィリアム『蠅の王』黒原  
敏行訳、早川書房、二〇一七年]
- Gregor, Ian & Mark Kinkead-Weekes. *William Golding: A Critical Study*. Faber and Faber, 1967.
- Ireland, Brian. “William Golding’s *Lord of the Flies* in Historical Context.” *Critical Insights: Lord of the  
Flies*, edited by Sarah Fredericks. Grey House Publishing, 2017, pp. 27-40.
- Keating, James. “Interview with William Golding.” *William Golding’s Lord of the Flies: Casebook  
Edition: Text, Notes & Criticism*, edited by James R. Baker and Arthur P. Ziegler, Jr. Penguin  
Books, 2016, pp. 209-16.
- Oldsey, Bernard Stanley & Stanley Weintraub. *The Art of William Golding*. Harcourt, Brace & World,  
1965.
- Paddy, David Ian. *The Empires of J. G. Ballard: An Imagined Geography*. Glyphi, 2015.
- Piette, Adam. “The Fictions of Nuclear War: From Hiroshima to Vietnam.” *The Edinburgh Companion  
to Twentieth-Century British and American War Literature*, edited by Adam Piette and Mark  
Rawlinson, Edinburgh UP, 2016, pp. 160-71.
- Wilson, D. Harlan. *J. G. Ballard*. U of Illinois P, 2017.
- 奥畑豊『ビッグ・ブラザーの世紀——英語圏における独裁者小説の系譜学』小鳥遊書房、二〇二一年  
黒原敏行「ウィリアム・ゴールドディング『蠅の王〔新訳版〕』」、翻訳ミステリー大賞シンジケート、  
二〇一七年四月一八日 [https://honyakumystery.jp/1492472726]
- 竹峰誠一郎『マーシャル諸島——終わりなき核被害を生きる』新泉社、二〇一五年
- 豊崎博光「キャッスル作戦とマーシャル諸島の人びと」『広島平和研究』第二巻、二〇一五年、21-46頁
- . 『世界のヒバクシャ1——マーシャル諸島住民と日本マグロ漁船乗組員』しれん舎、二〇一九年  
ファース、S『核の海——南太平洋非核地帯をめざして』河合伸訳、岩波書店、一九九〇年